佐脇家図面の調査

－明治期奈良県建造物保存修理工事の大工について－

薬師寺東塔は、明治31～33年（1898～1900）にかけて、古社寺保存法にもとづき解体修理工事がおこなわれた（以下明治修理とする）。工事の内容に関する資料として、「薬師寺三重塔修繕落成精算書」[1]があり、初層および二層の本屋以外はすべて解体されたことがわかる。また修理前と修理後の古写真を比較すると、尾垂木の垂下を支えるために入れられていた支柱を撤去し、二層・三層の裳階の壁を漆喰塗に変更し、初層裳階の北面に扉を追加している[2]。工事を担当した監督技師は明治29年（1896）より奈良県に赴任していた関野貞で、主任技手を藤本民次郎が務めた[3]。また、薬師寺東塔には明治修理時の棟札２枚が伝わっており、大工棟梁は橋本才治郎なる人物であった[4]。

この棟札には、「世話役」として佐脇直治郎、小三郎父子の名が記されている。「当山出入大工　都跡村字西之京」とあり、薬師寺や唐招提寺などに関係する大工の一家であったと推測される。現在佐脇家には一連の建築図面（以下佐脇家図面とする）が残されており、その点数は合計126点に及ぶ。図面の内容は、薬師寺東塔明治修理に関わるもののほか、唐招提寺講堂や、円成寺楼門などの奈良県下の古社寺保存修理工事に関わるものが大半で、その他にも、住宅や工場などの新築工事図面等が含まれる。

佐脇直治郎（1830～1908、棟札と聞き取り調査による）、小三郎（1866～1941）父子に関する資料はほとんど残っていない。小三郎は佐脇家現当主の２代前にあたり、佐脇家も先代までは建設業に携わっていたという。関野貞の日記「世路之志保里」明治31年10月10日の条[5]には、薬師寺東塔保存修理工事の大工棟梁の採用に関して「佐脇某（小三郎カ）」の名前が登場している。この時は、修理工事の棟梁として推薦された一人であった。この棟梁の推薦に関しては、薬師寺の信徒総代と出入大工の間で確執があったようで、最終的には橋本才治郎が棟梁として起用され、佐脇小三郎は大工世話役とされた。

佐脇家に伝わる図面のうち、薬師寺東塔に関わる図面は合計31枚ある。薬師寺東塔の明治修理に関する図面には、京都工藝繊維大学所蔵の藤本民次郎の一連の図面群（以下藤本図面とする）が伝わるが、その中の薬師寺東塔に関わる図面と比較すると、藤本図面が工事設計の検討や軒反りの計算など、工事監督として修理方針を検討するための図面群であるのに対し、佐脇家図面は足代桟橋（工事素屋根）の各種図面や東塔の部材番付などが多く含まれており、最終的な工事設計図群というよりも、修理

表４　佐脇家図面に含まれる明治期の奈良県建造物保存修理工事

名称	工事期間	工事監督	主任技手	大工	備考
唐招提寺金堂	明治31～32年 （1898～1899）	関野貞 塚本松治郎	木村米次郎	山田安太郎	佐脇家図面には含まれない。置札に「本寺出入大工」として佐脇小三郎の名が記載。
薬師寺東塔	明治31～33年 （1897～1900）	関野貞 塚本松治郎	藤本民次郎	橋本才治郎	「大工世話役」として佐脇父子の名が棟札に記載。
室生寺東塔（五重塔）	明治33～34年 （1900～1901）	関野貞 塚本松治郎	土居藤助		佐脇家図面に含まれる図面（図３）は明治32年作図。工事期間内の佐脇小三郎の工事への関与は不明。
法輪寺三重塔	明治35～36年 （1902～1903）	土屋純一 塚本松治郎	藤本民次郎		断面図のみ。
唐招提寺講堂	明治38～41年 （1905～1908）	土屋純一 天沼俊一 西崎辰之助	奥野栄蔵 藤本民次郎	佐脇小三郎	棟札より。
般若寺楼門	明治41～42年 （1908～1909）	天沼俊一 西崎辰之助	長田浅吉 吉田種次郎		棟札より。素屋根の図面や、大虹梁取合図など。
栄山寺八角堂	明治43～44年 （1910～1911）	天沼俊一 西崎辰之助	吉田種次郎		立面図のみ。
薬師寺東院堂	明治45～大正２年 （1912～1913）	天沼俊一 西崎辰之助	吉田種次郎	佐脇小三郎	小屋組図面。
円成寺楼門	大正4～5年 （1915～1916）	天沼俊一 西崎辰之助	上久保九一郎	佐脇小三郎	素屋根の断面図や金具類摺本など。
円成寺春日堂・白山堂	大正５年（1916）	天沼俊一 西崎辰之助	上久保九一郎	佐脇小三郎	佐脇家図面には含まれない。

※各項目は『文化財保存一〇〇年のあゆみ』（奈良県教育委員会、1968）をもとに作成し、各修理工事報告書により修正・補足した。

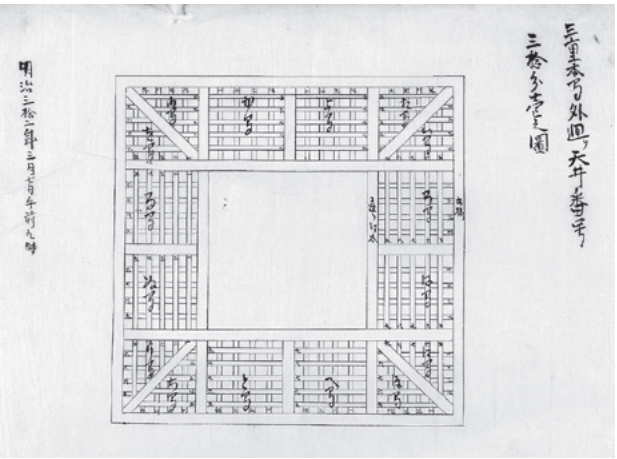

図33 「薬師寺東塔三重間外廻り天井番号」

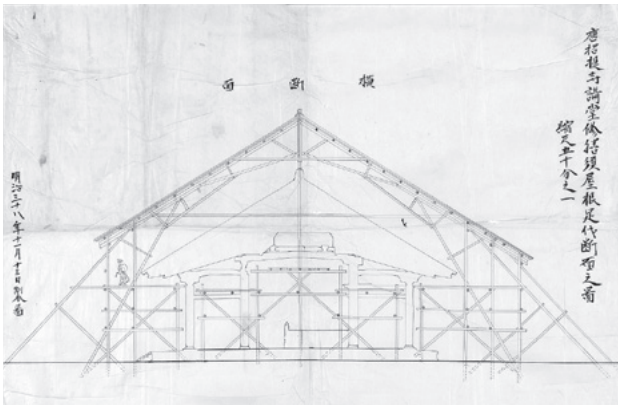

図34 「唐招提寺講堂修繕須屋根足代断面之図」

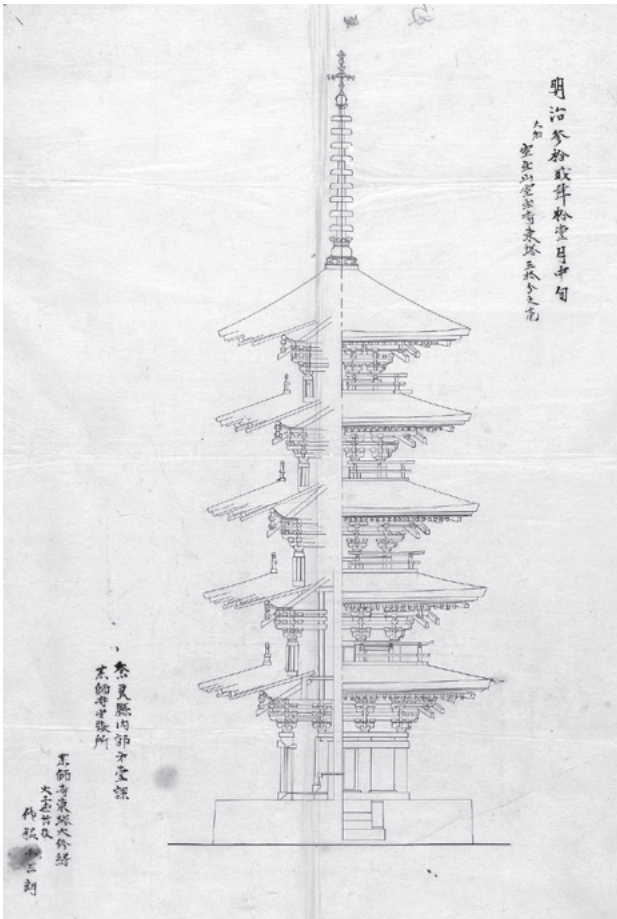

図35 「室生寺東塔断面立面図」

工事の過程で現場で記録した野帳的な図面を中心とするようである（図33）。特に素屋根の図面では各階の平面図や断面図などが残されており興味深い。また、薬師寺東塔の修理工事をおこなっている間に県内の他の塔建築も視察したようで、「室生寺東塔断面立面図（図35）」には、東塔の修理期間中である明治32年の記録と、「奈良縣内部第一課　薬師寺出張所　薬師寺東塔大修繕　大工世話役　佐脇小三郎」という署名が記されている。

ところで、佐脇小三郎の名は、薬師寺東塔以外の奈良県のおこなった他の保存修理工事でも記録されている（表４）。佐脇小三郎が最初に奈良県がおこなう修理事業に関わったのは、唐招提寺金堂の修理工事（明治31～32年）で、置札には「本山出入大工」として記載されている。その後、薬師寺東塔の工事を通じて藤本民次郎との信頼関係を築いたようで、記録からは佐脇小三郎の名は確認できないものの、佐脇家図面には藤本が主任技手を務めた法輪寺三重塔の図面が含まれており、佐脇小三郎が関わっていたことが推測できる。

さらに、唐招提寺講堂の保存修理工事では、藤本が主任技手を務め、佐脇小三郎は棟梁に抜擢されている。佐脇家図面にも唐招提寺講堂の修理工事に関わる図面が多数残されている（図34）。藤本図面には唐招提寺講堂に関する図面が少ないため、貴重な資料群といえよう。その後、佐脇小三郎は薬師寺東院堂、円成寺楼門・春日堂・白山堂の修理工事でも棟梁を務めており、佐脇家図面にはその際に描かれたとみられるものが含まれている。

以上のとおり、佐脇家図面が明治から大正にかけて奈良県のおこなった文化財建造物保存修理工事に関わった大工の図面群であることがあきらかとなった。中には非常に貴重な資料も含まれており、古社寺保存法の下における修理工事の実態を示した図面群としても評価することができる。今後、藤本図面と共に検討することにより、当時の保存修理工事の詳細があきらかになるであろう。

調査にあたって、佐脇和男氏に多大なご協力を得ました。記して御礼申し上げます。

（大林　潤・中村伸夫／財団法人京都伝統建築技術協会）

註

1）「薬師寺東塔修繕工事清算書」と「薬師寺東塔工事落成精算書」からなる。奈良県庁文書『古社寺修理清算書　奈良県社寺係』奈良県立図書情報館所蔵、1905。

2）『幕末明治期写真資料』（東京国立博物館蔵）など。

3）藤本民次郎の経歴については、清水重敦「明治後期の古社寺修理に関わる技術者の出自について」（『日本建築学会計画系論文集』558、2002）に詳しい。

4）奈良県教育委員会文化財保存課『薬師寺東塔及び南門修理工事報告書』1956。以下、各建物の修理に関しては修理工事報告書を参照。

5）関野貞研究会編『関野貞日記』中央公論美術出版、2009。